

看護用品の解説

痰を溜める容器として蓋付き粉ミルク缶の空き缶を利用した。

看護用品にまつわるエピソード

1949年頃、在宅治療を受けている結核患者には、痰壺として蓋付き粉ミルク缶の空き缶を利用させ、クレゾール液を入れ蓄痰するよう指導していた。ちり紙なども限られていたため、ユウナの葉を代用するよう勧めていた。空き缶に貯留した痰やちり紙代わりに使ったユウナの葉は掘った土の中に入れ、全て焼却するよう指導していた。在宅での結核患者の隔離は難しくカーテンなどで仕切る場合もあったが、患者は風下、子供は風上に寝かせる、または頭の位置を交互にして寝るなどにより、できる限り感染を広げない工夫をしていた。在宅の患者には喀痰検査が勧められており、ワクチンの入っていた空き瓶を検体容器として利用していた。

(仲田八重子, 2004)

解説

沖縄は第二次世界大戦の戦災ですべてが荒廃した。1945年8月に公衆衛生部が米軍命令で設立されたが、まだ行政機関としての機能を発揮するにいたらず、医療衛生の仕事は主に米国民政府野戦病院で戦傷者の手当であった。1951年10月に宮古保健所が設立された¹⁾。仲田さんの看護体験は、宮古保健所が設立される前の保健活動である。結核という病気の歴史が長く我々の生命を脅かし、公看業務の大半の時間をその対策に費やしてきたことが伺える。在宅の結核患者から家族に感染が広がらないよう生活の仕方に工夫をこらして、患者や家族に教育指導していたことが分かる。生活の隅々までゆきわたった丁寧な指導に、当時の公看の保健活動が成し遂げた業績の偉大さを感じる。

1) 稲福盛輝：沖縄疾病史，第一書房，P302～P303，1995.

(名城一枝, 2004)